

島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第10号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン
研究会事務局
所在地：〒690-8504
島根県松江市西川津町 1060
島根大学法文学部 渡部研究室
発行：2019年4月13日

【 会 長 の 交 代 】

会長就任のご挨拶

吉川 進

会長就任に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

最初に、前会長の常松正雄先生に、長年にわたるご指導を心より感謝し厚くお礼を申し上げます。先生は、深い学識と豊かな経験により当会のあるべき姿を具体的にお示しになり、会員、特に事務局が新しい問題を抱えているときには、懇切丁寧に的確な助言をしていただき、時には外部の関係者と話し合いの橋渡し役をしていただき会の方向が明確になることがしばしばありました。また、ハーンの英文テキストの先生の読みは深く、OED (Oxford English Dictionary) による語の定義を提示されたり、ハーンの知人の手紙を紹介したりして、作者ハーンの真意を読み解く方法をご教授なさいました。今後もこの会の顧問として従来にも増してのお力添えを心からお願いする次第であります。

さてこの度、不肖私が常松会長の後継者としての大役を務めることになりましたが、会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げると共に、今後心掛けておきたいことを二つ三つ申し述べます。

一つ目。組織としての安定した継続性を保ちたい。ハーンゆかりの土地松江はハーンを学ぶ最適の場所である。英語を好む一般の人々や学生をはじめ若い年代の人々の入会に期待し、今後この会の一層の発展を末永く継続させたい。

二つ目。研究会の性格上、テキストの読解のみならず、内部及び外部の講師による講義等を企画して広くハーンの実像に接近したい。

三つ目。テキスト（作品）は、読む人の年齢、知識、経験によりいかようにも解釈できる可能性を含む。従って、会員誰でも自分の思うこと、感じることを自由に発言し議論百出して、会そのものが大い

にもめることを期待する。誤読や理解不十分は大いに歓迎する。毎回の読書量は少なくとも確実に自分の身となり肉になると信じる。

会員の皆さん、毎月一回の読書研究会に備えて自分なりに下読みをして、当日は楽しく明るく開放的に学びの道を歩もうではありませんか。

最後になりましたが、非常に大切なこと。島根大学、特に大学図書館の皆様方のご支援あって初めて私たちの活動も有意義に歩み続けることができると信じています。従来と変わらぬ温かいご支援を心よりお願い申し上げます。

会長辞任に際して

常松正雄

初代会長高瀬彰典氏が、われわれがそれを認識していなかった停年退官を迎えられ、あっという間に去って行かれた感を受けたが、その事後処理に右往左往しながら、結局は後に残った会員の中で、最年長であった小生が、二代目会長を引き受けることになってしまった。先般周囲の会員諸氏から伺った所では、高瀬氏が退官されたのは、2013年3月末であったとのこと、それ以来6年近くに亘って会長の座に座らせて頂いていたとは、全然小生の頭の中にはなかったが、誠に光栄の至りであった。

このたび吉川進氏の温情を頂き、会長を辞任させて頂き誠に有難く思っている次第である。吉川氏には心から感謝申し上げたい。

さて、この5年余りの間、会長として何かこれと言った仕事をした覚えはない。ただ本研究会の活動の重要な一つとして、ハーンの作品をみんなで読む月例読書会だけは着実に続けてきた。これも実は、吉川進、長岡真吾両副会長を始め、横山純子事務局長その他の役員諸氏および会員一人ひとりの、献身的な活動や協力に支えられてきたお陰で、スムーズに進めてこられたのであって、ただただ皆様に感謝

するのみである。

この5年余りの中で、特筆すべきことがあるとすれば、それは、2015年にわれ等が研究会の10周年を迎えたことである。この記念すべき年のイベントとして副会長長岡真吾氏の「ラフカディオ・ハーンの生まれた世界—19世紀のイオニア諸島と英国情勢を中心に—」と題する特別講演会を、島根大学附属図書館と共催の形で催し、市民一般にも公開して同年10月3日に実施した。研究教育に極めて多忙であった長岡氏の献身的な協力と、附属図書館の御高配を戴いたことは誠に有難いことであった。長岡氏および附属図書館に対してはもちろんのこと、この記念イベントを実施する上で、楽屋裏でさまざまな作業を快くやって頂き、本研究会発足以来最も特筆すべき活動を実現して頂いた会員の皆様のご協力は今なお深い感謝の念をもって思い出している次第である。

会長としての数年を振り返ってみて思うことは、この間一度も不快な思いをしたことはない、会員皆様の暖かい思い遣りを戴いて、会長の責任などを殊更意識することはなかった。皆さんと一緒に毎月ハーンのさまざまな著作を読みながら楽しい中にいろいろと勉強させて頂いた日々が脳裏に浮かぶだけである。

吉川進氏は、長年高等学校の校長を勤められ、リーダーとしての豊富な経験をお持ちの方である。学生時代以来、語学、文学両面で幅広く英語の勉強も楽しんでこられ、これまでの豊富な蓄積があり、本研究会の会長として真に適任だと思います。新会長の下で会員の皆様がこれまで以上に読書会を楽しみ、研鑽を積まれ、更に活動を広げられ、本会が一層発展していくことを心から願っています。私は、これまで皆様から戴いた御協力、御親切にもう一度心から感謝申し上げ、これからは、一会員として皆様といっしょに本研究会発展の為に微力を尽くしたいと思います。本当に有難うございました。

【 研 究 小 論 】

ハーンの『文章作法の心得』と 村上春樹の『職業としての小説家』 を 読 ん で

寺本 真

読書会の原稿を随分前に依頼され、「はい、いいですよ」となんの考えもなく引き受けてしまったが、いざ書く段になり、一体何を書けばいいのかと思わず腕組みをしてしまった。私はラフカディオ・ハー

ンの著作をきちんと読んでいるわけではないし、読書会の参加率も良くないので、特に書くことが思い当たらない。短期間でハーンの著作を読み込んでいく意欲はないし、かといって全くハーンに関係のないことを書き連ねてもしょうがないだろうし、と思っているうちにあっという間に原稿の締め切りが近づいてしまった。仕方がないので、原稿を書くきっかけ作りのために、家の本棚から『さまよえる魂のうた 小泉八雲コレクション 池田雅之編訳（ちくま文庫）』を引っ張り出し、何か興味の持てそうなところを読んで見た。「文章作法の心得」という章があり、文章を書くことに少なからず関心があった私は、これなら何かを書けるかもしれないと希望的観測を持った。本棚には、『さまよえる～』の近くに村上春樹の『職業としての小説家（スイッチ・パブリッシング、2015年）』があった。村上春樹は、私が学生時代に最もよく読み、今も新作が出たら、すぐに購読する大好きな作家である。この本もまた文章を書く上でのヒントになり得る本であった。

ラフカディオ・ハーンの「文章作法の心得」—On Composition (Life and Literature, 1917) は、東京帝国大学時代の講義録である。ここでいう「文章」とは、文学的文章のことであり、ハーンは当時の帝大生たちに、「もっぱら文学という難しい手仕事に年季奉公を重ねてきた者としての立場から」、文学とは何か、どのようにして作品を書けばよいかを語っている。それに対し、村上春樹（以下、村上）の『職業としての小説家』は、村上がいかにして小説家になり、小説をどのように書いてきたかを、実直で飾り気のない文章で書いた自伝的エッセイである。この二つの作品は（もちろん、生きた〔生きている〕時代も考え方も違ってはいるだろうが）、文章をどのように書いていけばいいのか、そのヒントを与えてくれることになるだろう。また、二つの作品を読み比べ、比較や考察ができれば面白そうだ（面白そうか否かということが私の基本的な行動原則である）という思いもあった。

ハーンは、「文学は情緒表現の芸術」とであると学生たちに語っている。情緒という言葉は少し分かりづらいかも知れないが、ハーンによれば、情緒とは、涙や悲しみや失望とかではなく、「感覚や印象の後に生じる非常に複雑な感情のこと」である。情緒について、ハーンは一本の木に対する情緒を例に上げて説明を試みている。一本の木を見たとき、まず視覚から木の映像が得られるが、その映像を言葉にすることは簡単ではない。最初の印象を感覚とすると、情緒はその後にくる特殊な感情のことである。偉大な芸術家や作家と一般人との違いは、事物の容貌や性格（情緒）を認識するという点にあるという。「一

本の木、一つの山、一軒の家、一個の石にさえも、それぞれの顔つきや性格が見えるのである。われわれは適切な方法によって、ものの性格がわかるようになるように、自分自身を訓練することができる。」と述べている。

事物の容貌や性格を認識するという点においては、村上の小説技法にも通じるものがある（第五回「さて、何を書けばいいのか」）。村上は、小説を書く上で、ある事実の（ある人物の、ある事象の）興味深いいくつかの細部を記憶に留めておく」と記している。「それはどのような細部か？『あれっ』と思うような、具体的に興味深い細部です。できればうまく説明がつかないことの方がいい。理屈と合わなかったり、筋が微妙に食い違っていたり、何かしら首を傾げなくなったり、ミステリアスだったりしたら言うことはありません」。村上作品の人気の理由の一つは、それらの情緒表現と言えるべき細部が効果的に散りばめられ、読む者を物語の世界へ引き込む力を持っているからだろう。

次に、文体に関する二人の考え方や方法について見ていきたい。ハーンは「文体」と言うものは存在しておらず、別の呼び名がなされるべきであると主張している。文体は「性格」であると。ある作家の文体とは何を意味しているのか。ハーンは次のように区別している。「独特の文章の韻律的形式」、「言葉の音楽的価値に基づく音の響き」、「力や色彩についての独特な印象を与える言葉の選択」の三点である。仮にある本をタイトルや作家名を見ずに読み進めていっても「これは〇〇の作品だ」とわかるのは、その作品には作者の文体が滲み出ているからである。ハーンにはハーンの、村上には村上の文体がある。文体には、誰のものでもないオリジナリティーが必要であるし、印象的な言葉の選択も必要になってくる。村上が最初の小説『風の歌を聴け』を書こうとしたとき、先行する世代の作家たちに対抗するためには、新しい言葉と文体が必要であると感じたという（第五回「さて、何を書けばいいのか？」）。そこで、いろいろな断片的なエピソードやイメージや光景や言葉を、小説という容器の中にどんどん放り込んで、それを立体的に組み合わせていき、文体を構成していったという。そしてその作業を進めるにあたり、音楽が何より役立ったそうだ。「ちょうど音楽を演奏するような要領で、僕は文章を作っていました」。これはまさにハーンの「言葉の音楽的価値に基づく音の響き」という表現と同じようなことであろう。村上も音楽を演奏するように、いつも「正しいリズムを求め、相応しい響きと音色を探って」いるのである。

教育や学校に対する二人の考え方もとても興味深い。ハーンは、「教育が大工や鍛冶屋になるのに役立たないのと同様に、詩人や物語作家となるためにも、教育は何の助けにもならない」と断言している。いくら木材の種類や道具を暗記したとしても、実際に試行錯誤しながら作っていかない限り、大工や鍛冶屋にはなれない。同様に、文学の知識を増やしたり理論に精通したりしたとしても、文学を創作する上では何も役に立たないというのだ。それは教育を、おそらく真面目に受けてきた帝大生たちにとっては、かなりインパクトのある発言であったのではないだろうか。

一方で、村上は「学校について」という回（第8回）で、学校という「制度」に対して非肯定的な意見を述べている。村上自身はあまり学校の勉強に熱心ではなく、「本を読んだり、音楽を聴いたり、映画を見に行ったり、海に泳ぎに行ったり、野球をしたり…」したことが、小説を書く上では重要であったのだろう。そして学校という制度の中で、「想像力を持っている子供たちの想像力を圧殺してくれるな」と訴えている。右を向けと言われたら右を向かねばならないという圧力が、子供たちの想像力や個性を無くしかねないと危惧しているのだろう。

二人の教育や学校に対する考え方は多少過激であったり、偏った部分があったりするかも知れない。教育にも文学作品を書く上でプラスになることもあるだろうし、個性を育む教育をしている学校も少なからずあるかも知れない。しかし、一般的に、教育や学校というものは、一律的であったり、汎用性を求めたり、時に同調圧力を受ける場になることがある。そこでは人と違うことよりは人と足並みを揃えることを求められる。人と違う意見を言うことは、とても勇気のいることである。ハーンは、19世紀のイギリス文学の悪い徴候として、文体がほとんど姿を消してしまっていると嘆いている。共通の文体が遍在し、個性が埋没してしまっていると。そのような時代には、新しい文体や文学の進展は望みにくくなってしまう。そうならないためにも、少なくとも、作家になろうと志す人間は、人生に彩りを与えてくれる体験や経験を重ね、個性や想像力を育み、世間の圧力に埋没しないよう気概を持つ必要があるだろう。

文学作家になるためには、当然ながら文章を書くためのセンスや才能といったものが気になるだろう。村上は、小説家として生き残っていくためには「何か特別なもの」が必要になると語っている。そこにはある種の「資格」のようなものが求められるという。こういっては身も蓋もないが、そのよう

な資格がないと判断したら、速やかに小説家になることを諦めた方が良いでしょう。もちろん、幸か不幸か、そのような資格があったとしても、それだけでは生き残ってはいけなはずだ。「何よりも、優れた著作はすべて、計り知れない努力なしでは生まれない。」とハーンも述べている。一つの文学作品が生み出されるまでには何回も何十回も書き換えられ、訂正されているという。古典として後世に受け継がれていく作品というのは、例外なく類まれな努力によって作り上げられているのだ。村上も長編小説を原稿の段階でも数え切れないくらい書き直し、出版社に渡してゲラになってからも、相手がうんざりするくらい何度もゲラを出してもらおうという（第六回「時間を味方につけるー長編小説を書くこと」）。村上はその行為を「とんかち仕事」に例えている（ハーンもまた講義の冒頭、文学という仕事を大工職人に例えており、二人の作品作りに対する似通った表現方法が面白い）。村上は次のように言う。「同じ文章を何度も読み返して響きを確認めたり、言葉の順番を入れ替えたり、些細な表現を変更したり、そういう「とんかち仕事」が僕は根っから好きなのです」。そして「養生」という言葉を使い、一通り書き終えた小説をしばらく「寝かせる」ことも重要だという。作品を寝かせることで、作品に対して冷静で客観的な目で見られるようになるのだ。これは文章家であれば、多かれ少なかれ誰しも自然と行なっていることであろう。しかし、一流の文学作品であれば、そのようなプロセスはより細かく検証され、時間がかけられ、回数が重ねられていくこととなる。そのような努力なしには、偉大な文学作品は生まれないと言えるだろう。

以上、二つの作品を読み、文章を書く上でのヒントを探ってみた。まだまだ書き切れていない重要なことがたくさんあると思うが、それは実際に二つの作品を読んで頂くことが一番良いと思う。最後に、本稿の締めくくりとして、果たして自分自身に文学的な資質があるか否かを、村上の言葉で確かめてみることにしよう。「答えはただひとつ、実際に水に放り込んでみて、浮かぶか沈むかで見定めるしかありません。乱暴な言い方ですが、まあ人生というのはそういう風にできているみたいです」。

【 例 会 の 記 録 】

事務局長 横山 純子

第 113 回例会

2018 年 10 月 13 日（土）14:00~16:00

島根大学附属図書館ラーニングコモンズ2

参加13名 “My First Day in the Orient” 27. 12-

27.34 & “The Chief City of the Province of the Gods” 139.1-141. 18

第 114 回例会

2018 年 11 月 10 日（土）14:00~16:00

島根大学附属図書館ラーニングコモンズ2 参加9名

総会&“The Chief City of the Province of the Gods” 141.20-142.26

第 115 回例会

2018 年 12 月 8 日（土）14:00~16:00

島根大学附属図書館ラーニングコモンズ2 参加10名

“The Chief City of the Province of the Gods” 142.27-146.5

第 116 回例会

2019 年 1 月 12 日（土）14:00~16:00

島根大学学生市民交流ハウス 参加12名 “The Chief City of the Province of the Gods” 146.6-149.16

第 117 回例会

2019 年 2 月 9 日（土）14:00~16:00

島根大学学生市民交流ハウス 参加11名 “The Chief City of the Province of the Gods” 149.8-154.8

第 118 回例会

2019 年 3 月 9 日（土）14:00~16:00

島根大学学生市民交流ハウス 参加11名 “The Chief City of the Province of the Gods” 154.10-158.33

2019年4月13日の会は下記のちらしにあるような公開の講演と作品鑑賞会を行います。ご期待ください。



編集後記：常松先生、長い間ありがとうございました。吉川先生、よろしく願いいたします。若い会員、HARUKIST?、のご寄稿、新鮮でした。ありがとうございました。（高橋栄）